

新皇正統紀

卷之二

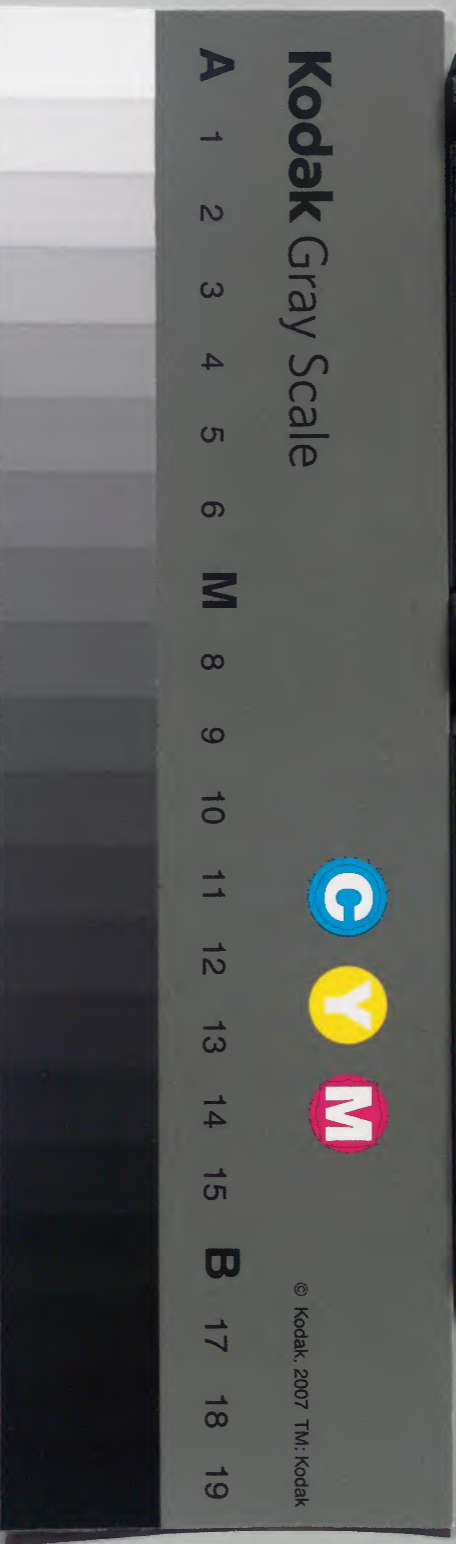
和書門類	
函	一三
架	九
冊	六

內閣文庫	
和書	四二五〇六
架冊號類	三六

內閣文庫	
番號	和 42506
冊數	6 (1)
函號	269 30

269-30

帝紀十卷



神代正統記卷之一目録

大神十六

國帝三

國後三

皇孫三

皇孫三

皇孫三

皇孫三

皇孫三

皇孫三

皇孫三

皇孫三



神皇正統記卷之一目録

天神七代

常立

捷

豊斟

泥土

沙土

大戸

大若

面足

憎根

神皇正統記卷一

伊弉諾

伊弉册

入地神

天照大神

忌穗耳

瓊瓊杵

彦火火出見

鸕鷀草葺不合

大日

神皇正統記卷之一

引經方一之終

神皇正統記卷之一

大日本之神國なり天祖よりめて基成ひし

皇神なくく統を傳へ給ふ事國の事なり

朝よりばもろき事なくひなり神國といふ事なり

神代より豊葦原の子孫而秋乃瑞穂の事天地

開闢の事なりめよりけり名未重天祖國常之事陽神

陰神よりばもろき事なくひなり勅よりなり天照大神

孫よりゆけり事なくひなり此名未重根本此事

事とは初めなり又も大八洲國といふ事陽神

陰神此國を生じし事なり八の嶋なり

神皇正統記卷之一

よふまゝく名は言ふはなり又を耶麻土と云は  
大八洲の中津西に名なるを東八州ありあふふむび  
御座るを秋津根列といふ神を生かひ一是を  
大日本豊後津州やう名所く今を三十八ヶ國  
わそり中列きりし上は神代を富東征しり  
代この富於たり依りし名所とるまゝく始七列と  
もまゝく耶麻土と云なる一唐を國の國の  
出るし天下を國といひ漢乃地よりわらう  
まは海内漢と名はる一耶麻土  
やふまゝは山迹をいふ一土地り

流のうかひつゝ乾くと山との性事  
わらうまは山迹と云或る古語に依りて  
云しり右依りしにやまゝく山止なりといふ  
大日本とも大倭とも云は此國漢字傳く後  
國の名はかくしり字をい大日本とてしるは耶麻  
土と云はるはゆなり大日靈社神國なるもそ  
もこもあつた又日の出る所なりちりあまは  
う義をかくれと字はまゝに日乃をわくを讀す  
耶麻土と云はるは國の漢字は洲すも  
わらうまはるは山迹をいふ一土地り

日本書紀卷之二

を文字よりよき所なり國の名とせるよりあはれ又  
 古より大日本とともあり大の字を加ふと日本と  
 是より外乃らる大日本を秋津と云懿徳孝元  
 孝元等此神裔皆大日本の字あり垂仁天皇乃  
 神母大日本姫といふ是皆大の字あり天神饒  
 速日等天の磐船りの皇大座をたまりて座を  
 足日本の皇と云ふ神武乃神武日本般余武  
 と号し是より孝安を日本足開化と推日本と  
 号し系行を皇孫子小碓皇子は日本武皇と  
 名付たり是より大を加ふはなるは是即なり

やまもく後世にまはる大日靈の皇と云ふは  
 後世に後世にもけり之の皇は漢土より字を  
 傳るる時倭と云く此國の名なり用字するを即  
 志く又この字は耶麻土と訓し日本乃らる  
 は大を加へると又除くも印し通別し  
 漢土より倭と名はるは是は此國の人  
 物と皮ちりしに海國の名ははる云々  
 といふは此國也といふははる云々  
 といふは漢土より樂浪の  
 百餘國は是なりと云ふ前漢のときよきと云はる

神皇正統記卷之八



有れに宮ありけり名ありてとて神代  
よき秋は根と云名ありて神代に  
此外とありて名ありて細支子足國と  
秀吉國とも玉垣内海ともとて又杖素國とも  
あるや東海の中よ杖素の本あり日の出る所なり  
と云く是より日本と東より阿婆いよそく  
此国より杖素ありてと云くは中つら  
名よきありてと云くは凡肉典の流り須海といふ  
山ありて山を廻りて七の金山ありて中間を  
みよき水海なり金山乃あり四大海あり此

海中に大洲あり洲と云く又二の申洲ありと  
南洲を大膽部と云く又岡浮提と云く  
南洲の中んり阿耨達と云く山ありて山は頂池と  
阿耨達と云くは阿耨と云くは阿耨と云くは  
七由旬と云くは百由旬なり  
一由旬といは十里也六尺を一由旬と云く三百六十歩  
よ一里といは五里と云くは由旬と云くは  
け樹列の中んりありて高し依て列の名と  
よ阿耨達山は南を大雪山と云く葱嶺なり葱嶺  
の山は胡國雪山の南にありて東より  
震旦國ありて波新と云くは此膽部  
列を縦横七由旬里と云くは計ありて二十八万



里東海より西海入りし海もく九万里南海より  
北海入りし海もく又九万里天皇も正申り  
よきより依り膝部の中國より地のあり又九  
万里震旦のありと云ふも立るにたゞるおきは一  
色の小國なり日本も皮土をもたすく海中ま  
あり南於れ後命儒正水原の傳教大師に申列たり  
ときるよりしきりきりし南列と東列との申なる  
遮摩羅と云列なるへさしや花嚴路より東の海  
中にしあり合對山と云わらあるは今乃大倭の合  
剛山のゆかりと云はれし世國を天皇とるものと

震旦もいと東の大海乃申にあり別及はりして  
神明の宣統を傳へたる國なりたると世嘗乃  
ゆきなきはな地開闢の初めいはくもかりあるま  
るゝひと三國れ統をのく美なりと云れ統は  
世のよりまを以初初と云 初は成住懷空の四あり名れの悟戒あり  
一増一減をい初と云二十の悟戒を二中初  
二天知るん 光帝と云天皇の御中り合意の雲  
を起し梵天に遍布を昂大雨以つて風揚  
のよりけりて水極となる増長しと天  
よにいつあると又大風ありて結成吹きて申  
よ投をく昂大梵をた文殿とたすり水以事



















かまふくしー靈山りて不働のこころなり  
言んるや西院ありてむじ飛田と云ふ山ありて  
し神を天柱國柱と云ふも深秘の山ありて  
や凡神ありてぬくの矣流ありて日本記  
紀古後拾遺等にのせざらんゆゑ未だ  
又伝用しるかまふくしー枝の申一史を  
事おほしーいんや笑書りては正と云ふ  
くくふをやかかくて此二神おんりて八の  
うと新小先淡路の別とういふは漢道徳  
別と云次は伊予の二名れ別をいふす一  
方り

四面ありてを愛止比賣と云ふ事不伊予也二  
比賣と云ふは横波なり三を大直於比賣といふ  
是を阿波なり四は速依別といふ事は土佐也  
次は筑紫の別をいふす又一方に四面ありて  
白日別と云ふ是を筑紫なり枝は筑紫筑後と云  
二を豊日別と云ふ是を筑國ありて枝は筑前筑後  
と云ふ三は豊日別といふ是は肥の國ありて枝は  
肥前肥後といふ四を豊土比賣別と云ふ事  
日向ありては日向大陽障摩と云ふ  
所代のりては次は一岐の別を生ます天  
名はあつては



天ノノのりせく東の改まさは多新次子蛭之  
うこまのこをりりするさく脚も久天警豫  
樟船よりせて風のまふくもあつた次子素  
々鳥さび候うこまと常考けい、不悉にりく父  
母ハ神なりカネツと根の由りい好とあさまふ  
此と根を常神なりまうい候まに依く一女三男  
まやなりまをるくあうある神みる二神の西生  
よ候りますところも國のまをるく一りや生  
所ひのりなはことけりけい神をけ傳へ言る  
こ作れ其及火の神軒俱突智成生まじり時

陰神ヤリく神退れよの陽神ううんんん  
ス火ま三陰なりまはま三陰まのく神也  
血のさくくも我まゆめ神とかななり経津彦  
神 齋主の神もい 健甕樞神 民雷の神もい 乃祖なり  
今の榎敷の神 陽神 今の桑治の神 乃祖なり  
まの哲ありまの陰神ううんんく此國の人を  
一曰り ちかひのこまがし 子歌あはれま一とあたまひくまは陽神  
ま子ハ百頭と生食り一や宮ひまり依く百能  
なは天益人としま記まかまのまらとせむ  
の記はま也陽神入りけく日初の小戸は掃栲原



天原と云ふは六日の小宮と云ふは天原日本  
國に在りて八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて  
八咫乃御鏡と云ふは海に在りて

たもきりつれりしにあらん天照太神御  
すくして共仕備へとす侍給ふはそ  
回かきよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御  
まをさしよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御  
まをさしよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御  
まをさしよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御  
まをさしよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御  
まをさしよしをあらんたまさし折約を  
清きくろきつれりしにあらん天照太神御

神皇正統記卷之二

拾遺の説

又の説



思慮と云神のぬぐもにあり石凝姥と云神を  
とく日神乃亦形の鏡を持せしむるなり  
なりと云く鏡持神れりありあり  
次は鏡持く鏡なりありふましく  
悦ありあり初八日皇居にましく  
とく八坂瓊の玉紙はくくくく  
とく白幣白幣をつくく先手置帆負  
先乃二神をて大使小使の材を切く  
はくくく心むはくく物とくはく  
天香山の五百箇の青賢木を根ま  
に結りては

八坂瓊の玉紙ありけ申枝ま八咫の鏡を  
下枝はくく和幣白和幣と云か  
命の神れ子也とて持けはくく  
味速青真の子或は神も  
葛河くはくく羅葛と云  
飲惣木の葉紙と云ま  
石窟れ前にはく能優を  
ま又庭燎と云ま  
を集へくたがへりも  
神やうくく系と云此は石窟  
神皇正統記卷之一





大地のたぬり天日高命今此より先又のまきし  
 ひこすりとやんするまかよくまらんやと宮本勅  
 のまきにさるとやんすは此をともり湯津の  
 はら横入りおなすこはらにさす八幡乃酒を  
 八の槽よりさるとく侍所よまんとすく彼大地  
 本より頭よのく一槽入り入て吞酔て秘あり  
 ぐるをさるとさる十握の叙をぬりく寸々に  
 切の尾よりりて叙乃又すうかたお割く  
 入行へん一の叙ありさるとすはゆはさるあり  
 手まは天乃びく雲の叙とん付  
日本書紀にいたるや  
あつたそま羅の

又おけんやとさく天照太神よなりと  
 小なりそはら出雲乃法地りり宮城  
 輪回格と住新小大已貴神  
 素戔嗚尊もは井入り根の國は乾きぬ大汝  
 神此國入りとゆはく  
今の世まの  
太神よさる 天下を經  
 葦原の地を新しけり依く是を大國  
 の神とも大物とともちと幸魂奇魂を大儒の  
 三輪の神入ります

才二代正武吾弟速日天照極耳尊  
まこやちくく  
まのちが  
ミノ  
たか  
ひさ  
み 尊靈

皇女栲幡子に命にありて饒速日等瓊杵  
尊を生みしめく吾勝等葦原の中列より下り  
まじへりて子を御子生さしめりては下  
りて中列より上りて天上より下りては下  
日等より下りては下りては下りては下り  
神の瑞寶を授けし瓊津鏡一巻時鏡一八極  
鏡一玉一死及玉一足玉一道及玉一蛇比礼一蛇比礼  
品物比礼一蛇比礼也此等もや神等もは下り  
凡國に生れしは下りては下りては下りては下り  
下りては下りては下りては下りては下りては下り  
三種乃杵

器を授けしは下りては下りては下りては下り  
饒速日等もは下りては下りては下りては下り  
まじへりては下りては下りては下りては下り  
神吾勝等もは天上より下りては下りては下り  
一三より下りては下りては下りては下りては下り  
まじへりては下りては下りては下りては下り  
才三代天津彦火瓊杵等天孫もは皇孫  
もは中皇祖天照太神等皇孫等もは皇孫  
めくもは下りては下りては下りては下りては下り  
下りては下りては下りては下りては下りては下り



こまにかめ新交よ海一里八十系の神を録し  
皇孫を海ほりまはしきとしてまひぬ  
つりて新  
つりて天照大神高皇產靈尊お神し  
孫織くし一孫八百系の神勅を兼りて神共  
又はうまうの信神乃上首三十二神ありて  
小玉部の神と云ふ天兒屋命中臣の天太玉命忌部の  
天細女命後母の石凝姥命後作の玉屋命玉作の  
此中に申長忌部の二神をいれし神の神勅  
をうもく皇孫を文とけまかり孫小又三孫  
の神實とさほまはるし一は先ありかめ皇孫

は勅一室く葦原乃子八百秋の孫徳比國  
系子孫可立之地也宣尔皇孫就乃治家也矣  
室祚之隆富与天壤各窮者矣又太神志乃  
寶鏡をもちたまひ皇孫りしつぎく故て吾  
見視此寶鏡當想視系可立同床共殿以爲齋  
鏡とのこま八坂瓊珠曲玉天の叢雲の劔と加  
へて種と以又此く足のあはしくに分明なる  
をまらして天下り照照したる八坂瓊の宝珠  
が神のこまを曲妙をきりて天下をま  
めか神劔をむのさきく不煩との誠きつ





かくし世瓊と梓さるる海まししり獲回るや  
云神系りあひいす是れまきてりうやまよく同成  
あつらる神なりきしに天細国女の神はあ  
ぬ皇孫いほくふのいしるまのいしるまのいしるま  
ちうん執事志の日向入るる子猶れ穂觸の者には  
まよとくしあまの伴現れお十鈴乃河よりいしる  
るしとやゆ枝神のゆ乃まに穂觸の者より  
ありててりうて志のまらと新へさるるをゆとめらるる  
まよ事後國勝と云神まよの所子ありてりう者  
ふ昔回れ長枝の少時なんよふりかるへととま

まはまらありすまを新々り家にゆの神大山祇  
二の女あり掃を敬る長姫と云まよハ磐石妹を木花  
耶姫と云まよハ花本二人をめりて新小婦とわら  
兄にいくるまをまよとて掃を敬るめはひりり  
長姫と云まよハ磐石二人をめりて新小婦とわら  
命おろくそ磐石のまよとてあくま一只妹をめ  
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
詛言るにまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
木花岡耶姫めはひりて一妻よまよまよまよ天孫河  
や一め新々まよ不眠さてまよまよまよまよまよまよ



若くははく火をえれらるに三人の許子は生  
新小川のまはれおろり言ふ時生ます火園海  
命と云火乃はくるとなりトには生海とを火の命  
こつは後より生れはを火に出見るとや此三文  
の御子滅ん火もやりど母の神をてこあつた  
つと父乃神悦ひまゝくたりけき天下を治め  
新あつた三十萬八子ぬ百三十三年といひは  
てこまき天上よりさくまは海と神連の御事を  
年序けらるとかこまじやと地づくまゝなり  
のの幾年と給くつりまき事みくきる文なり

柞天竺の説り人安吾等なり一八萬八千子累年  
なりと述より百年又一千減く二百二十  
の時或六百累糴邊佛出新まといふけい仏のおせを鷓  
鷓つや草ふき造あせ月あせ不合あせをれ来さ海のゆかなきは林茂天竺  
仙嶽の夜二百九十年はあつた百年より一をまゝして二を  
こまより上へかきよまきなり此瓊よにの柞あをれ初めはくま加葉あと云  
仏のお新ひたの時や高り侍らん人安二万累年  
時この佛の出給ひ言ひと我  
才四代彦火の出見ると御見火園海命海乃  
幸まの山此まの山の幸まなりなりあはれ又なかく



新ひりくを子珠をもちて潮と志しをけり  
是より天日嗣をたてしす  
其玉作らば新ひりく産物なり  
産物作らば待新くせ申す  
依作を望むとぬく海をり  
鷓鴣の羽ましくぬきし  
其産物なり  
鷓鴣草菅不合  
そのんまを産の時  
おんまを産の時  
おんまを産の時

船を新ひりく海陸をりてお海  
なりしす  
久りぬ板は子れき  
なまきりくありし  
やーるひははせ  
新ひりく六十三万七千八百九十三年  
のせり  
きりす是を混沌と云  
重濁物地とれり  
三才と云

天下を治るる一萬八千一年天皇地皇人皇がど  
いふお積りて九十一代一百八万二千七百六十年  
とくにありしときは一百万七千六百六十年  
志しむ盤石のよりめもけさる此神世も末つ  
高むるなりや  
才に代表波激波鷓鴣草菁不合さる中御母  
玉非と名はあゆみさる名なり御姨玉依姫  
さつぎに御子なりけり子なり  
命綿飯命三毛入野命神日本般名余彦  
般名余彦と太子なりて天日嗣とせん續

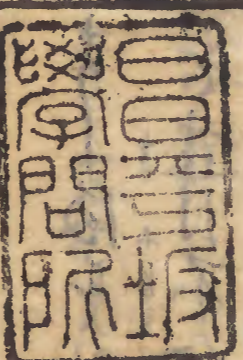
あまのつとむる世神の御代七十余年  
もはる川の三宮乃初め伏犧と云ふあり次  
神農氏軒轅氏三代ありさる五萬八千四百  
二年  
一説は二万六千八百二十七年  
秋經中の新古今集の序は伏犧皇の世にして四千万年と云ふ  
いふもの説はさるなり  
唐氏有虞氏  
一年一より入り夏殷周の三代ありて夏は八十七  
四百三十二年殷より三十一百六十九年周は世  
となりて才に代は服と云ふさる二十六  
甲寅の年よりさる國ありて一百万二十年二の



百と少の百官百姓など之に之くきるべきなりむり  
皇祖天照大神と孫よりみことたりたり寔祚  
を隆當与天壤多富たあり地もむりよかり



と日神も光とありためといりや三柱の神聖  
と祝也あやまきくたうとをなる日嗣とる  
ありあはれ



と日神も光とありためといりや三柱の神聖  
と祝也あやまきくたうとをなる日嗣とる  
ありあはれ

慶應

百一ノノカク百ノカク  
皇祖天照大神ニ奉  
を隆當与天壤多雲霧とあり  
山ノ内ノ山ノ内とあり  
二ノ内ノ内ノ内とあり  
三ノ内ノ内ノ内とあり  
四ノ内ノ内ノ内とあり  
五ノ内ノ内ノ内とあり  
六ノ内ノ内ノ内とあり  
七ノ内ノ内ノ内とあり  
八ノ内ノ内ノ内とあり  
九ノ内ノ内ノ内とあり  
十ノ内ノ内ノ内とあり

